

IV-119

港湾における景観特性の分析と 景観計画への反映手法について

— 横浜港、下田港におけるケーススタディ —

運輸省港湾技術研究所 正員 東島義郎

運輸省港湾技術研究所 正員 竹下正俊

1. まえがき

良好な港湾景観を形成する上で、港湾および港湾の周辺が有する景観資源の保全・活用は重要な課題であり、景観計画を策定するにあたって港湾一帯の景観特性（ポテンシャル）を的確に把握し、土地利用や施設配置、デザインなどの検討に反映していくことが必要である。

本研究は、上記の観点から、港湾の景観特性の分析手法の提案を行い、その実用性、有効性を検証するために、大小二つの港湾を対象として景観資源の特性分析を行い、その結果を景観計画へ反映させるためのケーススタディを試みたものである。

2. 手法の提案

2.1 港湾の立地特性の把握

計画対象港湾を取り巻く諸条件や港湾計画等の将来計画の中から、景観計画に重要と考えられる

- ①港湾の位置と形状
- ②港湾の性格と港湾区域の状況
- ③港湾の個性を支える基本要素となっている地形
- ④港湾の景観とそれを取り巻くまちとの関係
- ⑤港湾空間へのアクセス条件
- ⑥港湾の将来計画が景観に与える影響

などについて整理を行い、港とまちや地形の関係、港湾の各ゾーンの景観的な性格などを明らかにする。

2.2 景観資源の候補の抽出

対象資源、視点資源、場の資源といった港湾一帯の景観資源となり得る要素を網羅的に抽出する。抽出の方法として、①地形図などによる地形上のランドマークや展望地点の抽出、②観光ガイドブックや

パンフレットによる見どころの抽出、③港湾や都市関連の資料などによる抽出、④現地踏査、⑤ヒアリングなどが挙げられる。特に新たな景観資源の開拓といった観点からは現地踏査に重点をおいた作業が望まれる。

2.3 要となる景観資源の抽出と視覚的有効性の検討

2.2で抽出した対象資源の中から、港湾の個性を支え、印象的な眺めを構成し得る要となる景観資源を抽出し、港湾の各空間においてその資源を眺める視覚的有効性を明らかにする。

要となる景観資源を抽出するにあたって、「群を抜く大スケール」、「特徴ある輪郭線」、「汀線上（アイストップ）に位置する」などを基準に絵画、写真等も参考に抽出作業を行う。

2.4 視点資源の評価

図面上で整理された要となる対象資源の視覚的有効性を確認するとともに、構図や脈絡（視点や眺めのもつ意味合い）といった眺めの良さを左右する要因について検討し、視点としての価値を明らかにする。

3. ケーススタディ

3.1 ケーススタディ対象港湾

次の2港を大小各港湾の代表例として選択した。

・横浜港（神奈川県）

全体の整備がかなり進んでいる「大都市港湾」

・下田港（静岡県）

自然と開発との調和が重要な「地方港湾」

3.2 ケーススタディの結果

(1) 横浜港

網羅的に33の景観資源の抽出を行い、その中から歴史的な景観資料である横浜絵や、市民アンケート、写真コンテストなどの客観的な判断資料及び現地踏査による確認等を合わせ、最終的に要となる対象資源として「横浜ベイブリッジ」、「富士山」、「ランドマークタワー」、「大型客船」等を抽出し、それぞれの視覚的有効性の検討を行った（図-1に一例を示す）。その結果、「新港ふ頭」、「山下ふ頭の先端」、「大黒ふ頭の南側」、「瑞穂ふ頭の先端」などは、現在市民が自由に立ち入れる状況になっていないが船舶や横浜ベイブリッジなどを眺めるときの非常に高い視点資源としてのポテンシャルを有するということや、展望台などの高い視点が存在すれば「MM21臨港パーク」などは港全体を一目で把握できる視点場となりうる場所であることが明らかとなった。

(2) 下田港

網羅的に24の景観資源の抽出を行い、その中から要となる対象資源として「下田富士」、「犬走島〜狼煙崎の海岸」等を抽出し、それぞれの視覚的有効性の検討を行った（図-2に一例を示す）。下田港周辺は地形に起伏が多いため検討にあたっては、100mメッシュの標高データによる電算処理でお

おまかな可視・不可視の判断もあわせて行った。その結果、下田港周辺には「下田公園」、「武山」、「玉泉寺」などの視点場として高いポテンシャルを持っている場所が多いが、港を見るという観点からの視点場整備がなされていないため一般市民があまり利用できない状況である。これらの改善点として、道路等のアクセス整備や視点場としての整備を行うと良好な港湾景観の眺めを提供できることが明らかとなった。

4. あとがき

今回行った研究は、冒頭でも述べたとおり港湾景観計画手法を確立するために、横浜港、下田港という具体的な港湾を用いて、試行的にケーススタディを行ったものである。この客観的な分析に基づいた研究成果は、現在各地で進められている港湾の景観計画作成に少なからず役立つものと考えている。今後、さらにケーススタディの追加等を行い、より具体的な提案を行っていく予定である。

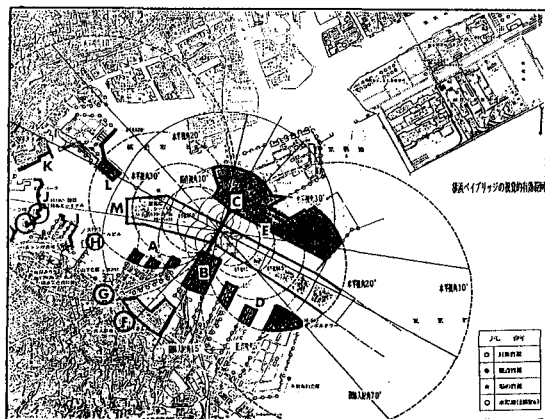


図-1 視覚的有効性の検討例（横浜ベイブリッジ）

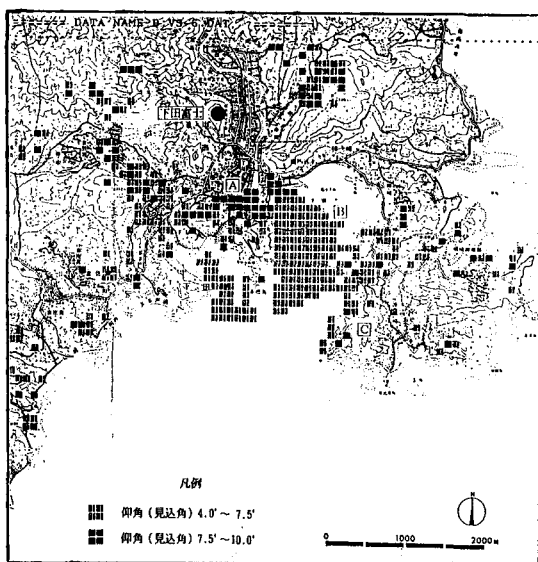


図-2 視覚的有効性の検討例（下田富士）